
優しい言葉

侑真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい言葉

【コード】

N8240F

【作者名】

侑真

【あらすじ】

ホイッスル！より三上×笠井です。年越しを二人で過ごすお話。甘めです。

22時を少し回ったとき、携帯の着信音が部屋に響いた。待ちわびていた笠井はワンコールでそれに出る。

「はい！竹巳です！」

「…出るのはええよ。着いたから出てきな。」

電話越しに溜め息混じりの笑い声が聴こえてきた。

「あ、はい、今行きます！」

笑われたことに少しの恥ずかしさを覚え、早口で返事をして携帯を切った。

付き合いはじめてもう7年を超えたというのに、いまだに三上の一挙一動に反応してしまう。

今日は12月31日。

新年を恋人と迎え初日の出を見るのが、いつの間にか二人の恒例となっていた。

今年も例にもれず、初日の出を見に行くことになったので、笠井は三上の迎えを待っていたのだ。

あらかじめ出しておいたコートを引っ掛け、急いで靴を履く。いつてきますの挨拶もそこそこに、笠井は慌ただしく家を出た。

家の前の道には見慣れた車が一台。

吐く息は白く、夜の空気に消えていく。

街灯に照らされたその車まで早足で近付くと、笠井がバックミラーに映ったらしく車がゆっくり動き出した。

助手席に回り込めるだけのスペースを作って車はまた停車した。

「すみません、お待たせしました。」

助手席のドアを開け、冷たい空気が入らないように素早く中に入り込む。

「今日寒いな。あ、シートベルトしたか？」

「はい、大丈夫です。」

カチャンと金属音がしたのを確認して、三上はゆっくり発車した。

「先輩、もうすぐ着きますね。」

潮の匂いとその音が、海が近いことを教えてくれた。

車内にかかるラジオでは、もうすぐ新年のカウントダウンが始まるうとしてしている。

潮の音に混ぜってエンジンの音が鳴り響く。

海岸近くには街灯は少なく、真っ暗な道を車のヘッドライトが照らしている。

砂浜へ続く道へ車を走らせながら、三上は視界が悪いのに何やら楽しそうに運転していた。

「先輩、楽しそうですね。」

笠井がくすりと笑うと、三上は意味有り気な目線を寄越した。

「なに？お前は楽しくないわけ？」

タイヤが砂を踏み、不安定に車体が揺れる。

「な、何でそうなるんですかあ！」

「どうなの？俺といて、楽しい？つまらない？」

車を止めて三上が意地悪に笠井へ答えを促す。

通ってきた砂の上には綺麗にタイヤのあとが残っていた。

直球の質問に素直に答えるのもシャクだなと思っていると、ふいに三上は笠井の右手をつかんだ。

笠井が思わず目を向けると、ニヤリと笑った三上と目が合う。

「俺は竹巳と居られて嬉しいよ。」

いきなりの言葉に笠井の頬がうつすらと朱に染まる。

繋いだ手にどちらともなく力が入る。

「先輩、俺…。」

言葉を詰まらせる笠井を三上はそっと引き寄せた。

付き合い始めた頃より一回り大きくなった胸に素直に身体を預ける。

7年という月日の中で、だんだんと気持ちを言葉に出すことになくなってきた。
隣にいるのが当たり前になっていて、お互いの気持ちを確認することも少なくなっていた。

車内の時計が23時59分を示した。

ラジオからはパーソナリティの明るい声が流れ、年明けのカウントダウンが始まった。

「先輩…。」

「ん？」

三上の背中に腕を回すと、戸惑うように息を飲むのが分かった。

「…3、2、1！Happy new year！」

「俺、先輩が好きですよ。」

ラジオが年明けを告げるなか、笠井は徐々に自分の気持ちを言葉にした。

ゆっくりと身体を起こして三上の目を見つめる。

暗闇の中で、電子パネルの青白い明かりが二人の顔を浮かび上げさせる。

「好きです。」

「竹巳…。」

呟いた三上には普段の冗談混じりの表情などどこにも無かった。

真っ直ぐ見つめられた視線が痛いくらいで、忘れかけていた甘酸っぱい感覚が笠井の胸を締め付けた。
こんなに真剣に対峙するのは久々で、ドキドキという鼓動の音がやけに大きく聴こえる。

三上の右手が笠井の頬を撫でた。それを合図に三上の唇が笠井のそれに軽く重なる。

すぐに離れてしまった唇を目で追うと、それは笑みの形を作った。

「知ってるよ、バーカ。」

そう言っただけで伸ばされた手によって笠井の綺麗な黒髪がサラリと揺れた。

優しい表情をした三上に思わず目を奪われる。

「愛してるよ、竹巳。今年も来年も…この先ずっとな。」

笠井の頬に優しいキスが落とされた。

e n d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8240f/>

優しい言葉

2010年10月21日23時56分発行